

優秀演題抄録

6 安心した生活空間の構築 ～人との関わりを楽しむために～

【演 者】五十嵐 早紀 【所 属】会田記念リハビリテーション病院

【共同演者】中村 美歌（作業療法士）

【キーワード】認知、生活環境、コミュニケーション

【はじめに】

生活環境の変化により社会参加の機会が減少し、認知機能や日常生活に支障をきたすとされている(坂上真理, 2006)。今回入院を機に認知機能が低下し、不穏行動に陥っていた事例に対して、安心した生活空間を構築できるよう介入したので以下に報告する。なお、本報告にあたり事例の同意は得ている。

【事例紹介】

80歳代後半男性。X年Y月左視床出血を発症し、33日目当院入院。63日目突発性気腹症にて転院し、77日目再入院。病前は妻と息子の3人暮らし。畑仕事や園芸、近所付き合いを大切にしていた。

【初期評価】

参加制約：対人交流、趣味活動の制約。活動制約：車いすにて日常生活活動全般に介助。機能障害：上田式片麻痺機能テスト；右上肢7手指8下肢7。認知機能面；改訂長谷川式簡易知能評価スケール(HDS-R)；入院時13点、再入院時は指示が入らず中止。N式老年者精神状態尺度(NMスケール)；入院時10点、再入院時7点。

【主目標】

施設にて利用者や職員、家族との交流を楽しみ安心した生活を送る。

【経過】

再入院時、帰宅願望が強く不穏行動あり。初期：注意散漫なため閉鎖的空間にて、短時間でちぎり絵のカレンダーを作成。一回で達成感が得られるようパーツを組み合わせ一つの作品になるよう実施したが、集中して行えない日もあり。完成後日付の確認に用いた。職員から賞賛された事で喜びや自信となり、次の作品作りへの意欲に繋がった。しかし、依然として帰宅願望や不穏行動は認められた。中期：絵柄決定の為、昔話やその月に連想されるものを聴取。作業場をロビーに変更した事で、他患から話かけられ会話を楽しみながら集中して行う事が可能。気の合う他患と風船バレーや一緒にテレビ、新聞が見られる環境を設定。馴染みある存在が出来た事で、ロビーで過ごす機会が増え不穏行動が減少。後期：習慣化や介助量軽減の為整容や排泄訓練等を実施。病棟と連携しトイレ誘導を開始した事で目的をもって行動する機会が増えた。また次の施設で対人交流が円滑に行えるよう回想ボード作成の為、事例の人生を語ってもらい、笑いながら話す様子が見られた。さらに職員を介して共通点を持つ他患を記憶した事で、自発的に話す機会が増えた。退院時、回想ボードを使用し認知機能面の維持や対人交流が図れるよう報告書にて申し送った。

【結果】

NMスケール25点、HDS-R16点に向上。介護老人保健施設入所後、回想ボードを使用し対人交流を楽しみながら生活している。

【考察】

本事例は①生活歴を用いて自己表現や意欲を引き出した事、②場や作業を共有し馴染みある存在を増やした事、③他者から賞賛され自己有能感が高まった事で、安心して生活できる空間が構築され、目的を持った行動や対人交流の拡大に繋がったと考える。また、施設への環境の変化を伴う為、事例が早期から環境に馴染めるよう配慮する事も重要であると考えられる。